

明治時代における染織・服飾研究の成立 —「集古会」の活動を中心に—

The Establishment of Textile and Clothing Research in the Meiji Era
—Focusing on the Activities of the “Shukokai”—

莊 加 直 子
Naoko SHOKA

日本女子大学大学院紀要
家政学研究科・人間生活学研究科
第 24 号

明治時代における染織・服飾研究の成立 —「集古会」の活動を中心に—

The Establishment of Textile and Clothing Research in the Meiji Era
—Focusing on the Activities of the “Shukokai”—

莊 加 直 子*

Naoko SHOKA

Abstract Little is known about the relatively recent establishment of studies into the dyeing and weaving of artifacts, such as Edo-era kosodes. This paper focuses on the activities of an organization called *Shukokai*, which was founded in Meiji 29 (1896) to facilitate an exchange of ideas about antique artwork. *Shukokai* published a journal called *Shukokai Shi*, which recorded its activities. Beginning in Meiji 32, *Shukokai* held regular meetings, each with a specific theme, to showcase antique artwork; and according to *Shukokai Shi*, the displayed collections included dyeing and weaving artifacts. The journal descriptions of dyeing and weaving artifacts resemble the captions seen in art exhibitions at today's museums, with introductions, illustrations, explanations of the fabrics and techniques used, and measurements. This paper concludes that dyeing and weaving artifacts were discussed in the Meiji era, and that their study (and that of costumes) also began in that era.

Key words: *Shukokai* 集古会, history of dyeing and weaving 染織史, history of costume 服飾史, museum 博物館, kosode 小袖

1. 研究の背景と目的

江戸時代の小袖などの染織品の研究が、近代、いつどのように確立し、どのように今日まで引き継がれてきているのであろうかと考えた時、詳しく述べられた先行研究はすくない¹⁾。筆者は、小袖様式の一つである「慶長小袖」という学術用語の成立の過程について解明をしたく、研究を続けてきた。その結果、大正時代に言葉の始まりを見出しているものの²⁾、その周辺の染織研究史はほとんど未解明である。

そこで本稿では、明治29年(1896)から始まったとされる「集古会」を中心に明治時代の染織・服飾

研究について明らかにしたいと考える。なぜなら、「集古会」の活動の記録である『集古會誌』の中に収録されている「集古会記事」には、明治32年(1899)9月に「元禄年間を中心とした婦女子に関する物品」、さらに、明治34年(1901)5月に「女装」をテーマに設けた品評会が開催された記録が掲載されているからである。よって、「集古会」では、染織品が他の美術品と同じような価値を持ち検証される対象であったのであろうと考えられる。そこで、「集古会」から出された冊子などの記述をもとに、明治時代に染織品がどのように取り扱われ、染織・服飾研究がどのように行われ、後の時代にどう影響を与えたのかを検証し、染織・服飾研究の成立の解明に少しでも近づけたいと考える。

* 人間生活学研究科生活環境学専攻
Graduate School of Human Life Science, Division of
Living Environment

2. 先行研究の検討

「集古会」についての先行研究は、染織・服飾の分野ではないが、中井淳史氏、牧野和夫氏、森哲也氏の論考がある。中井淳史氏の「集古の伝統 尚古の系譜—日本歴史好古学の近代」³⁾では、明治時代の考古学について「集古会」の発起人のひとりである八木樊三郎の考え方を紹介している。八木は、大きく分けると2つの潮流があったとしている。八木樊三郎の属した東京大学の坪井正五郎の研究室を中心とする大学派と、皇室博物館を中心とする博物館派である。そして、「一別派」として「集古会」があったという⁴⁾。さらに、「集古会」の開催履歴などについても表にまとめられている⁵⁾。

牧野和夫氏は、「『集古会』と『百鬼夜行絵巻』との関連性についての覚書」⁶⁾の中で、「集古会」と「研究」について、「集古会誌」が出版されていることについても述べている。

また、森哲也氏の博士論文「東大寺文書の形成と伝来に関する基礎的研究」⁷⁾においても、近年の東大寺文書の研究と国学者・好古家のネットワークが関連づけられる中で、「集古会」がその一つとして考察されている。

さらに、また、論文などにはなっていないものの東京大学付属図書館で「坪井正五郎と明治のヲタクの世界」が2011年(平成23)7月29日～10月20日の会期で開催されており、このセクションⅢで「集古会」とそこに関わった人たちの紹介がされている⁸⁾。

本稿では、これらの先行研究をあしがかりに、現在、先行研究においてアプローチのない染織・服飾研究の視点から、この会で取り上げられて、研究・考察された染織品について論じていきたい。

3. 「集古会」について

『集古会誌』の「集古会記事」によると、「第1回」は明治29年(1896)1月5日正午から「東京上野公園大佛前韻松亭」⁹⁾にて開催された。集古会の活動記録である「集古誌」「集古会記事」「集古会誌」「集古」は、昭和55年(1980)に思文閣出版より、全8巻にまとめられ復刻されている。それによるとこの会は昭和19年(1944)まで続いたとされ、この会の発起については

今回我々の發起にて集古懇話會と云ふ者を設立せり會の目的は其名に示すが如く凡ての古器物を集めて彼我打ち解け話し合ふと云ふにあり即ち汎く世の同好者を會し各自所有の古物を携帶して互に品評を下し傍ら經驗を語り考説を述べ以て談笑の間に智識を交換するを旨とす、會員は開會毎に集合したる人々より成り別に制規を設けずして何人も随意に入會するを得ること、せり世間同好の諸氏は陸續賛同あらんことを希望す

帝国大學寄宿舎	佐藤傳藏
小石川區指ヶ谷町九十二番地	大野延太郎 ¹⁰⁾
発起者 神田區駿河台南甲賀町九番地	八木樊三郎 ¹¹⁾
麴町區四番町十三番地	林 若吉 ¹²⁾
渡臺中	田中正太郎

とかかれていた¹³⁾。要約すると、「集古会」は古物について意見を交換しあう同好会のようなもので、おのの自身の所有する古物を持ち寄り、批評し、論考を述べ、互いの知識を交換する場所であり、この会への参加の規定は特に設けず、随時入会できるとされていた。

4. 「集古会」における染織品の出品について

明治29年(1896)4月26日に神田中町1丁目4番地富岡方にて開催された第3回の集古会記事の中に林若吉所蔵の「那覇婦人所用衣服」がある¹⁴⁾が「集古会」における、これが染織品の初出であろう。

次に、明治32年(1899)9月25日に富岡にて開催された第17回では、「元禄年間を中心とした婦女子に関する物品」を紹介している。この会では染織品が出品されるだけでなく、「會員清水晴風氏の盡力にて従来元禄古物を携帶した一派の同志者十數名本会に入会し」¹⁵⁾とあるように、元禄の古物を所蔵する会員が増えた。そして、「次會より題を設けて出品することとし第十八例會に扇面及盃第十九例會は正月に際すればとて七福神に因めるものと決し」¹⁶⁾とあるように、第18回からは課題がきめられることとなった。

婦人用縫模様	寛永頃より天保頃迄	七種	清水晴風氏
縫模様振袖袂	釜屋出と云ふ	二枚	同
婦女人形の袖		三重	同
古代釜屋出辻模様婦人小袖		一重	野口彦平氏
絹縮白茶地古代釜屋辻模様留袖		一重	同 ¹⁷⁾

この第17回では計62件の元禄年間の古物が出品され、その中で染織品は、以下の5件である。

これらの染織品が現存のどの染織品であるかはわからないものの、名称がつけられていることと、元禄年間として紹介されていることから、すくなくともこの会に集う人々のなかである程度、時代判定をされていることが確認できる。この染織品の所蔵者は2名で一人は玩具人形の収集家であった清水仁衛(晴風)で、もう一人は野口彦平である。野口彦平は大彦という呉服商で、染織品を収蔵していた。それらの染織品は現在、「大彦コレクション」として東京国立博物館に収蔵されている¹⁸⁾。

そして、明治34(1901)年の第31回で、有職物、楽器、女装、古瓦が課題とされたのである。ここでは衣服と櫛や帽子といった女子の服装品が出品されている。この中で衣服は、13件出品され、作品名称や製作年代や作品解説がつけられている。これらを抜き出すと次のとおりである。

- | | |
|--|-------------|
| 一 袷 松かさね松菱の模様 | 一 襲 東京 松浦伯爵 |
| 一 袴 紅及濃 | 二 腰 同 |
| 一 婦人火事装束 | 一 具 同 |
| 頭巾○羽織○小袴○胸當 <small>帯で縫</small> ○內衣 <small>紅白</small> ○襦袢○帯 | |
| 一 筥狹子 | 一個 同 |
| 一 女小袖 寛政時代 | 一枚 同 野口彦平 |
| 羽二重裾模様壁色五所紋 <small>藍</small> 裾及び襟の模様は花桐縞にして地は藍に茶色なり | |
| 一 同 同時代 | |
| 羽二重裾模様五所紋 <small>藍</small> 地は茶色にて模様の色は黒と浅黄を用ゐる白の縞縞にて香の圖を出たせり | |
| 一 同 同 | 一枚 同 |
| 紋縮緬地みなと鼠五所紋 <small>藍</small> 古代模様を各色にて染貫或は縫取にて裾襟に散布したり以上三點は無垢ともいふ | |
| 一 同下着 同 | 一枚 同 |
| 本龜綾無垢白地に雪中山水を繪かき鳥と樹木の縫取なり | |
| 一 同單物 同 | 一枚 同 |
| 絹縮の八掛附單物五所紋 <small>藍</small> 地色藍鼠裾模様四季の花鳥を輪畫に抜き其中に四季の花鳥を友禪染縫取と縞縞にして頭はしたるものなり | |
| 一 同 同 | 一枚 同 |
| 絹の單物白茶地裾に各種の楓葉を散布し其中へ友禪縞縞彩縞にて各種の文様をあらはせり | |
| 一 被衣 文化時代 中裁 | 一枚 同 |
| 羽二重濃花色地腰明き山道と稱する模様にて茶と紺の染分けなり | |
| 一 同 同 中裁 | 一枚 同 |
| 絹の腰明模様白地に金砂子にて霞を出し腰より裾に若松の文様を現せり | |
| 一 同 萬延時代 一ツ身 | 一枚 同 |
| 絹の鶯色四季の花を全軀に染出せり ¹⁹⁾ | |

上記の作品解説となりうる文字情報は、生地のことや、技法、文様がどのように施してあるのかについて述べている。また、時代も記載されており、先に述べた元禄時代に続き、時代判定がなされている。また、現在はだまかに江戸時代後期あるいは、幕末とされるこの時期について細かく時代判定をしている。

さらに、課題外出品としてこの第31回に模写図版と共に出品されている染織品がある(Fig. 1)。それは、現在、東京国立博物館所蔵の「重要文化財 白練緯地松皮菱竹模様小袖」(Fig. 2)である(指定名称は重要文化財「白地竹文辻が花染小袖」)。この染織品には次のような詳しい作品解説が付けられている。所蔵者は前述の野口彦平で、解説執筆者は不明である。



Fig. 1 Kosode (small-sleeved kimono) with a bamboo design on ground segmented with zigzag lines (copy of the Meiji era)

徳川家康着用小袖及帯 一着 野口彦平

小袖ぬぎに賜はりし物にて由來書に

一御紋付御小袖地羽二重白紫染
分竹紋模様一御紋付御帯金箔帯
模様右二
品慶長十五康成年從東照宮様十世鷲正次拝領被
附世々令傳來者也文政四享年七月吉日鷲十六
世藤原定賢忠とあれと委しく調ふるに地質ハ
練緯ねりめきにて紋附腰文様なり紫松皮菱肩貫染葵
丸の内丸の内
三葉葵五つ所紋色淺黄
細細大さ壹寸貳分長白地竹の模様
縹縹にて幹ハ革色に淺黄結目鹿子葉ハ縹縹の
上へ淺黄にてかきわりにせし也裏地ハ深紅もみ
絹
なり寸法ハ袖壹尺貳寸五分小人形ハ分袖口六
寸袖幅九寸肩幅九寸總丈四尺桁壹尺八寸身幅
後前とも壹尺同衽幅六寸五分裾下壹尺三寸五
分襟巾四寸貳分〇帯ハ唐草金箔摺模様にて菊葵



Fig. 2 Kosode (small-sleeved kimono) with a bamboo design on ground segmented with zigzag lines

の紋を金泥にてゑかく²⁰⁾

東京国立博物館のホームページには現在、この小袖の作品解説が掲載されているので以下に引用する。

小袖とは袖口を小さく縫い合わせた、袷仕立(あわせじたて)のきもので、表地と裏地の間にうすく真綿が入る。経糸(たていと)に生糸、緯糸(ぬきいと)に練糸(ねりいと)を用いて平織にした練緯地を、肩の部分で大胆に紫の松皮菱形に縫い締め、身頃を紫と白に染め分けている。右裾から力強く太い竹の幹と、若竹とが肩に向かって交差し、若竹の葉が肩と裾に大きく垂れている。竹は匹田紋り、幹や葉は紋りの輪郭に沿って細い墨線によって描き起こされ、一部に描き絵が施されている。紋は丸に三葉葵の五つ紋で紋りと墨線の描き起こしによって表されている。紅地菊桐文摺箔帯が付属品として現存する。付属文書によれば、狂言鷲流の家元が慶長15年(1610)に家康により拝領したという。能狂言を好み、自らも舞ったと記録が残される家康であるから、演能用として誂えた可能性のある小袖と見解を持たれる一領である。²¹⁾

これらの解説を比べると、伝来や生地などについてはおおそ同じ内容で、技法は東京国立博物館のものの方がより細かく分析されている。明治34年(1901)3月開催の第31回「集古会」の出品目録であることから、この『集古會誌』上に書かれている内容は、その数カ月前には確定されていなければならないと考える。そのことから考えると、染織品は、「集古会」においては、他の古物同様に研究されていたのであろう。

さらに、野口彦平は、明治35年(1902)の第37回集古会「課題 雛人形と雛道具」において課題外出品として、「御殿用織物 数十切」を出品している²²⁾。この出品物は、模写による図版はないものの織物の細かい内容が書かれている。この後も、野口彦平は、明治38年(1905)5月の第53回「課題 戦争並に勝負に關するもの」に「諺かるた 一組」と「嵯峨人形 武者 一体」を出品している²³⁾。

これらを通して、明治30年代には染織品についての調査研究が行なわれ、今日の展覧会における作品解説にも近い解説がつけられていることが確認できる。

また、一方で、明治45年(1912)3月25日付の日出新聞において、次のような記事が見られる。

既報の如く昨日午後一時より同四時まで岡崎町

京都府立図書館樓上に於て集古會例会を開く當日の出席課題は『維新前渡の和蘭物』及び『對をなすもの』と云ふ規程に基き出品したるものにして中にも來觀者の目を惹きたるもの和蘭物の中に多く・・・・(中略)・・・・其他對のもの、部にては三村竹清氏藏各地方産箸六十餘種、骨牌、雛人形などにて當日は好青の日曜日とて來觀者頗る多く非常に賑ひたと尚ほ同會の本年度に於る開會日及出品課題が五月十二日より十五日まで同所にて『大津繪』九月二十二日に『秋に關するもの』『紙に關するもの』『慶長より元祿に至る古物』十一月十日は『古經類』『婦人服飾品』『餅に關するもの』等なりと²⁴⁾

しかし、この時期の「集古會誌」をたどってみても、京都における開催はない。また明治45年(1912)5月に青柳亭にて第87回集古會が開催されているものの、この時の課題は「丸きもの」、「肖像」である²⁵⁾。そして、この新聞記事で書かれた、明治45年(1912)、すなわち大正元年の9月22日に「集古會」が開催されているのかということだが、大正元年(1912)9月21日に青柳亭にて第89回が開催されており、この時の課題は、「肌につくもの」、「麴町日本橋區に關するもの」である²⁶⁾。また、同年11月9日に、青柳亭で、第90回が開催されている。課題は「車輛船舶に關するもの」、「繪馬扁額類」、「麻布京橋に關するもの」である²⁷⁾。この前後の「集古會」において、新聞記事に書かれた課題で開催された「集古會」は確認できないことと、京都での開催の確認ができない現状において、この新聞記事に書かれた会がどのようなものであったのかを知ることはできない。しかし、もし新聞記事に書かれた「集古會」の出品作品を確認できれば、一部の人々の中ではあるものの、「慶長から元祿の古物」がどのようなものであったのかを知ることができただろう。

5. 「集古會」の設立と発展

集古會のはじまりは、東京大学の人類学・考古学者であった坪井正五郎の研究室に在籍した大野延太郎、八木槌三郎、林若吉が発起人を始めた「集古懇談会」がはじまりとされる²⁸⁾。そこに、さまざまな人々がかかわったとされる。『集古會誌』の中には、

土器や石器といった考古学資料、古画、古文書といった国文学・国史学・歴史学の分野の資料、さらに人々の生活にまつわる衣類や食器、古銭から玩具までが掲載されている。これらは、第18回に課題が設けられてからは、そのテーマに沿い、分野を横断し出品され、検証されている。

この「集古會」において会の発展のスピードは比較的早い。明治32年(1899)までの『集古會誌』においては、会員は一種類だったが、明治33年(1900)の『集古會記事』には名誉会員、賛助会員、通常会員と組織が細分化されていることが確認できる。これは、明治32年(1899)7月22日の第22回例会において、規則を改正し、会長や幹事とは別に外部に評議員を置くことなどを決めたことを受けたものである²⁹⁾。その後、会則が『集古會記事』の表紙裏に記され、より多くの人が「集古會」にかかわり、参加することにつながったのであろう。実際に「第二十二例會の時には總員五十四人なりしが三十三年一月廿九回例會の時には總員百五十七人に及べり」³⁰⁾とあり、会員の増加が確認できる。

6. 「集古會」と染織・服飾研究に関わる人たち

この会が大きく組織化されていく中で、服飾・染織研究という視点で「集古會」をみると3つの事が確認できる。野口彦平の参画、関保之助の動向、「好古社」に関わる人たちの参画である。この3つについて述べてみる。

①野口彦平の参画

野口彦平については、明治32年(1899)6月16日号の『集古會誌』の会員名簿には名前がないが³¹⁾、明治33年(1900)12月30日発刊の『集古會誌』には会員名簿の甲種通常会員の中に名前が掲載されているので、この間に会員になったと考えられる。野口彦平は、元祿の古物を取り上げた明治32年(1899)年の第17回「集古會」では出品していたものの、会員ではなかった。おそらく、会員になったのは、「晴風の人脈によって、近代科学の研究者というカテゴリーに含まれない収集家・愛好家といった人々が集古會にくわったのである」³²⁾と中井淳史氏の指摘にあるように、研究者ではなく染織品のコレクターとして参加をしていったのであろう。

また明治36年(1903)の『集古會誌』掲載の名

簿では、名前が「彦平」であったが、明治37年(1904)の会誌の名簿では、「彦兵衛」となっており³³⁾、現在の東京国立博物館での表記と同じになっている。また明治39年(1906)5月発行の『集古會誌』では、会員名簿の表記の仕方に変更がみられ、通常会員には、「研究蒐集又は趣味を有する品目」という項目が追加されている。野口彦兵衛は「古衣装類」と紹介されている³⁴⁾。この項目により幅広いジャンルにわたる、この会の主旨を再度、確認することができる。この時点で野口彦兵衛以外に服飾・染織の分野に関することが書かれている人は、「服装圖案」と記入している「神田區台所町八 呉服商」とある吉野龜次郎である³⁵⁾。この「服装圖案」がどのようなものであったのかについてはわからないものの、研究や蒐集の対象であることが推察できる。

②関保之助の動向

明治31年(1898)4月20日『集古會誌』に関保之助は、「埴輪土偶 埴輪舎主人 関保之助」として会誌に掲載した図版の説明をしている。この時点では会員名簿に名前の記載がある。しかし、明治32年(1899)6月16日発行の『集古會誌』以降にだされた『集古會記事』の会員名簿に関保之助の名前はない。ただ、「集古会」に全くかわりがなくなったのかといえそうではなく、明治35年(1902)5月10日に外神田の青柳亭にて開催された第38回の「集古会」においては、課題が「甲冑武器、附兎人形菖蒲刀の種類」とあり、関保之助は「四半指物掉付一本、萌黄絲威胴丸 一領、保呂串付一個」の計3点を出品しており³⁶⁾、以降も会員名簿に名前がないものの、出品が確認できる³⁷⁾。

関保之助は、明治28年(1895)から、東京帝室博物館美術部で調査・蒐集を行った人で、大正8年(1919)から昭和8年(1931)まで京都恩賜博物館、奈良帝室博物館と関西に拠点を活動していた³⁸⁾。この間に関保之助は京都で、昭和6年(1931)から始まった染織祭の時代判定に携わっている。これらの業績から染織・服飾の分野で先行研究に取り上げられる研究者である。

また、この頃の関保之助の活動でもうひとつ重要なのが自身も武具・甲冑を蒐集していたこと、明治39年(1906)以降は自宅で装束着用写生研究会を定期的に開催していたことである³⁹⁾。

③「好古社」に関わる人達の参画

明治33年(1900)12月30日発行の『集古會記事』の中では、明治14年(1881)に設立された「好古社」に関わる人々の参加の確認ができる。好古社は、社長である福羽美静⁴⁰⁾と松浦詮⁴¹⁾、小杉樞郎⁴²⁾、井上頼圀⁴³⁾らにより国粹保存の為に設立された⁴⁴⁾。設立された当時『好古雑誌』⁴⁵⁾が発刊され、また、好古社による展覧会も上野公園美術協会の列品館で開催し、社員所蔵の古書画などを展示している⁴⁶⁾。「集古会」の会員名簿に福羽美静の名前はないものの、名誉会員に松浦詮、賛助会員に小杉樞郎、井上頼圀の名前がある。その他、集古会名簿に名前の挙がっている好古社社員には、名誉会員の黒川真頼⁴⁷⁾、賛助会員の横井時冬⁴⁸⁾、通常会員の青山清吉⁴⁹⁾らがいる。

これら好古社に属していた人達が、明治33年(1900)にどのような理由で「集古会」の会員になったのかについては、おおよそ、名誉会員や賛助会員となっており、「集古会」の会則が改正され、会員を3種にわけた時期とかさなることから、なんらかの働きかけなどがあったのではないかと考えるのが普通であろうが、文献などで確認をすることはできなかった。

関保之助が「集古会」の会員名簿から名前が消えたあとの、明治39年(1906)1月9日付の朝日新聞(朝刊)の6面に、「古實家関保之助氏方の好古會寫生(神代の服装)」という文字情報と、写生している様子がイラストで載せられている。この写生会の開催日時や開催主旨などは「好古社」による冊子や他の新聞記事などに記載が無いので、わからない。しかし、集古会元会員であり好古社と具体的に関わりがない関保之助が、染織品をテーマに写生会というものを「好古会」にて催したことは、「集古会」と「好古会」の間に何らかの人的交流があったことをうかがわせる。

7. まとめ

今回、「集古会」という、幅広い古物を扱う集まりで、主に染織品がどのようにとり扱われたかという視点で考察した。比較的早い段階から課題をもうけて出品されていることもあり、染織品が課題となりまとまって出品されることはなかったが、その課題のなかに括られて出品されるものであった。その

なかで、課題外とされながら出品された野口彦平の小袖は、図版の模写とともに作品解説がつけられていた。伝来を読み解き、生地や技法の考察、寸法といった、現在の博物館・美術館で開催される展覧会の図録などに掲載されている作品解説とほとんどかわらない解説である。そのような調査研究が明治30年代には実際におこなわれ、実施されていたということが確認できた。他の分野でも同じように作品解説などが付けられている出品作品もあった。この時期に、現在の展覧会と同様の作品解説のスタイルが、「集古会」をはじめとする一部の会では確立されていたことがあきらかとなった。

〔要 約〕

江戸時代の小袖などの染織品の研究が、近代において、どのように成立したのかについては、ほとんど未解明である。そこで、本稿では、明治29年(1896)から始まった「集古会」という古美術品について意見を交換しあう同好会の活動に着目する。「集古会」では、会の活動の記録として『集古會誌』が発刊されている。「集古会」の品評会では、明治32年(1899)から課題をもうけて古美術品が出品されていた。『集古會誌』では、染織品の出品の確認ができるだけでなく、染織品の模写とともに、生地や技法の細かい説明や、寸法、伝来の説明が掲載されている。この説明方法は、現在の博物館などで開催される展覧会の作品解説と同様である。そのことにより、明治時代に、すでに染織・服飾研究が始まっており、現在の博物館などの作品解説の様式が確立していたことがあきらかとなった。

図版提供・出典

Fig. 1: 集古 第1巻 思文閣出版

Fig. 2: 東京国立博物館提供

註

1) 管見では、森理恵：「キモノ美人」成立過程についての研究—「日本美術史（染織史）」の形成と日本画、和装界の動向—、イメージ&ジェンダー、3、76-95 (2002)、小山弓弦葉：「辻が花」の誕生〈ことば〉と〈染織技術〉をめぐる文化資質学、東京大学出版会（東京）(2012)等。

- 2) 莊加直子：修士論文「慶長小袖」の誕生と展開—名称と遺品の実態の解明、日本女子大学大学院家政学研究科（東京）(2015)
- 3) 中井淳史：集古の伝統 尚古の系譜—日本歴史考古学の近代、日本語・日本文化、31、大阪外語大学日本語日本文化センター、1-24 (2005)
- 4) 前掲3)、2
- 5) 前掲3)、10-13
- 6) 牧野和夫：「集古会」と「百鬼夜行絵巻」との関連性についての覚書、実践國文學、74、実践女子大学、16-26 (2008)
- 7) 森哲也：博士論文 東大寺文書の形成と伝来に関する基礎的研究、九州大学（福岡）(2015)
- 8) 東京大学付属図書館ホームページより
- 9) 集古会：集古、1、思文閣出版（京都）、19-20 (1980)（オリジナルは林若吉：集古會誌）
- 10) 大野延太郎は、大野雲外の本名（文久3年(1863)～昭和13年(1938)）。越前国丸岡にて出生。考古学者、画家として知られる。明治25年(1892)から帝国大学理科大学人類学研究室の図画制作を委嘱されるようになり、考古遺物の実測図を作成し、教室の学者から重宝された。また、遠隔地への調査へも同行、発掘品の調査・整理・研究にあたる。そのうち、自身も考古学に興味を覚え、独自に研究を行うようになり、自身の考えを述べるようになった。（大高利夫：明治大正人物事典Ⅱ文学・芸術・学術編、日外アソシエーツ株式会社（東京）、114 (2011)）
- 11) 八木契三郎（慶応2年(1866)～昭和17年(1942)）は明治・大正・昭和前期の考古学者。江戸にて出生。明治24年(1891)に、帝国大学理学大学人類学研究室に「標本取扱」として勤め、その間、坪井正五郎の指導のもとに論文などを発表。明治35年(1902)年、大学をさり、1年間、台湾総督府学務課嘱託として赴任する。無職の生活ののちに大正2年(1913)より、李王職博物館、旅順博物館、満州鉄道などに勤務した。（白井勝美 高村直助 鳥海靖 由井正臣：日本近現代人名辞典、吉川弘文館（東京）、1077 (2001)）
- 12) 林若吉は、林若樹の本名。書物収集家。（明治8年(1875)～昭和13年(1938)）。東京にて出生。東京帝国大学の坪井正五郎が主宰する人類学教室にはいりし、考古学を修める。考古学

- 以外にも書物、錦絵、玩具など幅広い趣味を持ち様々な物を収集、明治29年(1869)、坪井正五郎の人類研究室を主体に始まった趣味人同好会・集古会の中心人物として活躍、長く会誌「集古」の編集に携わった。収集の中でも書物に見るべき物が多く、大正期を代表する収集家の一人とされ、明治37年(1904)～昭和7(1932)の29年間に集めた書名、冊数などを記録した「若樹文庫取得書目」を残した。(大高利夫：明治大正人物事典Ⅱ文学・芸術・学術編、日外アソシエーツ株式会社(東京), 518(2011))
- 13) 前掲9), 19
 - 14) 前掲9), 27
 - 15) 前掲9), 143
 - 16) 前掲9), 148
 - 17) 前掲9), 145-147
 - 18) 小山弓弦葉：「辻が花」の誕生 〈ことば〉と〈染織技術〉をめぐる文化資質学、東京大学出版会(東京), 180-182(2012)
 - 19) 前掲9), 255-257
 - 20) 前掲9), 268-270
 - 21) 東京国立博物館ホームページより
 - 22) 前掲9), 380
 - 23) 集古会：集古, 2, 思文閣出版(京都), 175-181(1980)
 - 24) 日出新聞, 明治45年(1912)3月25日, 朝刊2面
 - 25) 集古会：集古, 3, 思文閣出版(京都), 288-292(1980)
 - 26) 前掲25), 334-358
 - 27) 前掲25), 355-358
 - 28) 前掲8)
 - 29) 前掲9), 161-163
 - 30) 前掲9), 161
 - 31) 前掲9), 159-160
 - 32) 前掲8), 3
 - 33) 前掲23), 40
 - 34) 前掲23), 264
 - 35) 前掲23), 264
 - 36) 前掲9), 386
 - 37) 前掲9), 423
 - 38) 前掲18), 179
 - 39) 前掲18), 178
 - 40) 福羽美静(ふくばびせい)(天保2年～明治40年(1831～1907))は幕末・明治の国学者であり官僚である。(野間省一：日本出版百年史, 日本書籍出版協会(東京), 1067-1070(1968))
 - 41) 松浦詮(天保11年～明治41年(1840～1908))は幕末・維新期の肥前平戸藩主で、明治元年(1868)より東京在住となっている。(白井勝美 高村直助 鳥海靖 由井正臣：日本近現代人名辞典, 吉川弘文館(東京), 994(2001))
 - 42) 小杉楹邨(こすぎすぎむら)(天保5年～明治43年(1834～1910))は明治時代の古典学者、文学博士。阿波徳島藩主蜂須賀家陪臣の生まれ。明治7年(1874)新政府の教部省に出仕、『古事類苑』編纂専務となり、以後、東京大学古典講習科准講師、帝国博物館技手、古社寺保存委員、東京美術学校教授、東京帝国大学文科大学講師、国語伝習所長、東京帝室博物館評議員を歴任した。古典・古美術に造詣が深く、宝物調査・古社寺保存・古典の研究普及に貢献した。(近代文学研究叢書, 11, 昭和女子大学近代文学研究室(東京), 小杉楹邨の該当頁は144-222(1959))
 - 43) 井上頼国(天保10年～大正3年(1839～1914))は文学博士であり、幕末・明治時代の国学者で、明治15年(1882)に設立された皇典講究所の設立の発起人の一人である。皇典講究所講師・国学院講師・『古事類苑』校閲員・宮内省図書寮御系譜課長・華族女学校教授・学習院教授・図書寮編修課長・六国史校訂材料主任などを歴任した。(白井勝美 高村直助 鳥海靖 由井正臣：日本近現代人名辞典, 吉川弘文館(東京), 108, (2001))
 - 44) 昭和女子大学近代文学研究室：近代文学研究叢書, 11, 昭和女子大学(東京), 148-149(1959)
 - 45) 佐伯利麿：好古雑誌, 1, 吉川半七(東京), (1881)
 - 46) 朝日新聞, 明治35年(1902)9月26日, 朝刊3面
 - 47) 黒川真頼(文政12年～明治39年(1829～1906))は江戸・明治時代の国学者。上野国山田郡桐生町の機業家生まれ。明治維新以降は大学少助教・文部権大助教・元老院権大書記生を歴任、文部省・内務省・農商務省を通じて博物局博物館(東京国立博物館の前身)の創設時代に史伝・図書課長として貢献し、『工芸志料』

『考古画譜』帝王部の編纂を行い、多くの論文を発表し、東京大学講師・東京学士会院会員・御歌所寄人・内国勸業博覧会審官を勤め、また帝国博物館・御歌所・帝国大学・東京美術学校・東京音楽学校に重要な位置を占めるなど幅広く学会・美術界にて活躍。（白井勝美 高村直助 鳥海靖 由井正臣：日本近現代人名辞典，吉川弘文館（東京），390，（2001））

- 48) 横井時冬（安政6年～明治39年（1859-1906））は明治時代に活躍した日本経済史学の先駆者。文学博士。名古屋藩士の家に生まれる。上京後、帝国大学の書庫および史料編纂係・帝国博物館・内閣文庫・水戸彰考館などの所蔵品を調

査し、『帝国商業史講義録』を刊行した。また31年（1898）に同書を基礎にして『日本工業史』『日本商業史』を公刊。（白井勝美 高村直助 鳥海靖 由井正臣：日本近現代人名辞典，吉川弘文館（東京），1125-1126（2001））

- 49) 青山清吉（慶応2（1866）～没年不詳）は雁金屋青山堂という享保年間創業の書籍業の8代目主人。（稲岡勝：出版文化人物事典—江戸から近現代・出版人1600人，日外アソシエーツ株式会社（東京），6（2013））

（指導教員 森理恵 教授）